

- 日 2018.6.23 (土)
- 時間 17:30-19:30
- 会場 大阪大学中之島センター501
- 参加者 榊形 金澤 森本 中川 有賀 菱田 (運営メンバー) 大学教員
- 記録 辻村 (※: 記録者)

キーワード

ケア的要素 道徳教科書 ケア的思考 傾聴

1. 「書く」ということ

○道徳の教科化

p4cについて「書く」ことが求められている(?)

←『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』p4c みやぎ出版企画委員会 (東京書籍) などの出版
分担執筆という「表現方法」

例えば

「ケア的要素」について「書く」ことに何の意味があるのか?

- ・理由づけ
 - ・数値化(評価)
- } 意味があるのか?

が、**書きたい**。(森本)

○参加者からの意見

—p4cについて「書かれたもの」に need はある。(中川)

←中川さんが書いているのは1次資料を2次資料として「読み手」(想定され得る)に向けて「書くこと」である。教員向けにp4cの歴史や哲学的対話の解説など(2次資料的なもの)を書きたいわけではない。(森本)

←哲学系の論文/社会学系の論文では、表現方法やエビデンスの設定が変わってくる。(辻村)

2. 書きたい(書かれたもの)

○本は書いてみたい。(森本、金澤)

書くのであれば、ケア的思考(思考力)について書きたい。→「ケア的なクラスになった」ということをどう書くべきか。(森本)

書くのであれば、それを読んで「はじめてみようか」と思わせるようなもの。

職場で広げる切掛けとなるのは教師の「驚き」である。(金澤)

←本を書きたいと思っていた。実際書くと「読み手を選ぶ」ことがわかった。(中川)

←活動を承認されたいと思えば本を書きたいとも思ったが、p4cによって生徒が短期に変容することが、他の教員には「無気味」に映るようだ。(中川)

○目的としての啓蒙

←普通の道徳の授業を見学する機会があった。そこでは「こどもは知らないから教える」というスタンス。ではない。p4cを契機に「こどもの話を聴く」ようになった。(※傾聴)¹ (金澤)

森本が道徳の授業で使っている「問」に関するアンケート結果のようなものをどのように現場の教員が活用したいと思うようになるか?→保護者からどのような評価を得ることができるか?(学級通信で授業内容を伝えている)→保護者には、子どものことを考えてなされている授業だということは伝わる。(森本)

↓

道徳の授業実践紹介—当番²の有効的活用による「問」の作成で、2時間で1単元完結できる。(有賀)

↓

3年生は、最後に書かせる文章と話した内容の乖離が大きい。話し言葉は良いが書き言葉になると駄目(森本)



これを記録として残す必要がある。

・p4cが好きだ—を前提に先ず「書きましょう」(柘形)

書くことの素材は沢山ある、読者を想定し「誰に向かって書くか」ということが間違い。

子ども/保護者のために

3. 近況報告

菱田

①「よ〜いドン!となりの人間国宝さん」でタローパンが取材される。(6/29 放映)

②HPをつくった。 <https://ikoma707.wixsite.com/hachimitsu>

「セーフティと身体知」

③池田市と大阪大学が連携—地域貢献 p4c japan の可能性

④p4c ノート

はちみつ堂に通う子どもとの交換ノート

中川

Prof.Splitter、Prof.Kohanによる「子どもの哲学」講演、ラウンドテーブル(立教大学5/28)に参加。

Kohanのワークショップは「問い」についての「問い」をつくる は、哲学の原初のように教務深かった。

↓

文字を書くことができない保育園児には「問い」に対する「問い」をつくるのは有効かもしれない。

(大学教員)

柘形

中川さんに手伝ってもらってルーブリック(※ルーブリック表?)をつくっている。でき次第報告。

以上

¹「積極的傾聴(Active Listening)」は、米国の心理学者でカウンセリングの大家であるカール・ロジャーズ(Carl Rogers)によって提唱されました。ロジャーズは、自らがカウンセリングを行った多くの事例(クライアント)を分析し、カウンセリングが有効であった事例に共通していた、聴く側の3要素として「共感的理解」、「無条件の肯定的関心」、「自己一致」をあげ、これらの人間尊重の態度に基づくカウンセリングを提唱しました。

『こころの耳』働く人のメンタルヘルス・ポータルサイト厚生労働省 Web http://kokoro.mhlw.go.jp/listen_001/

² 事前に児童の代表にクラスの意見をまとめさせて「問い」をつくらせる。